

実践団体情報

記入日	2020年1月7日（2019年度のチャレンジプラン）
実践団体名	被災地を写真でつなぐ実行委員会
代表者名	須磨 航
プラン全体のタイトル	九州北部豪雨の発災から復興 ～今だからできる学びのかたち～
電話番号	080-6368-1924
メールアドレス	7.5tunagu@gmail.com
実践団体の説明	<p>当団体は、2017年7月に発災した九州北部豪雨の災害ボランティア活動に従事し、同年12月、災害ボランティア参加者が少なくなっていることから写真展を開催。災害ボランティア参加者を増やすことを目的として開始したが、その後は、被災地の今を発信することや災害ボランティアの実際を伝えることへ目的を移し、活動を継続。</p> <p>2018年に任意団体を設立し、現在も災害ボランティアに従事しつつ、写真展全国キャラバン活動・被災地への防災研修ツアー、防災授業や講演活動などを行う。また、災害時における学生との連携体制の強化を模索している。</p>
所属メンバー	須磨 航（代表）、妹尾多恵（副代表） 仲田 匠、平山雅也、池田翔太
活動地域	全国（福岡県北九州市を中心として活動） 次年度より、本部を福井県に置く可能性有
活動開始時期・結成時期	2017年より写真展活動開始、2018年任意団体を設立
過去の活動履歴・受賞歴	<p>【防災】 写真展全国キャラバン活動、防災研修ツアーの開催、イベント出展、防災教育授業・地域における講演活動</p> <p>【災害支援】 2017年九州北部豪雨（福岡県朝倉市）、 2018年西日本豪雨（愛媛県宇和島市・西予市）、 2019年台風19号災害支援活動（長野県）</p>

プラン全体の概要	<p>2017年に発災した、九州北部豪雨の被災地の状況を伝える写真展活動を全国キャラバンとして展開し、被災時の状況や学生の活動について発信する。風化を防止するとともに、大学生災害ボランティア支援センター「うきはベース」の事例を発信し、これからの災害時に同様の機能が発揮されるような仕組みをつくることを目的とする。学生や地域住民が誰でも展示できる写真展セットの貸し出しを行うことで、当団体が主催するだけでなく、学生や地域住民の力により運営されることをサポートしていく。</p> <p>防災研修プログラムなどの研修事業では、参加者が「楽しみながら防災を学べる」「自分事にするのできる防災教育」の2つを主目的に実施。対象は、子どもから大人までだが、子ども自身が防災について考えることを重視した。自分事として捉えることが難しい防災について、被災地を実際に見ること、学校内の問題（いじめなど）について「災害」に置き換えて考えるから、子ども自身が、実際に何ができるのかを考えるきっかけづくりとなることができた。また、「我が家の防災計画書」の作成を通して、実践に結びつけることができた。</p>
----------	--

プランの年間活動記録

	プランの立案と調整	活動準備	実践活動
4月	・「防災研修プログラム実行委員会」による検討(1月～)。	・「防災研修プログラム」の内容検討、後援・協賛申請 ・使用施設許可の申請	・写真展の開催(主催)@福井県宇波西神社
5月	・写真展キット検討会		・写真展の開催(主催)@北九州市立総合農事センター
6月	・忘れないためにできることをしよう(追悼イベント企画)	・写真展キット作成 ・北九州市内小学校写真展打ち合わせ	・防災研修プログラムの開催
7月	・写真展における展示物の見直し ・新メンバーへの教育、被災地の現状把握をしよう(朝倉視察企画)	・写真展キット作成 ・写真展展示方法・展示物の見直し、再構成	・災害を考える3日間九州北部豪雨・西日本豪雨追悼イベント～あの日、あの時を忘れない～の開催 ・写真展の開催(主催)@北九州市立大学
8月		・小学生用の展示物作成	
9月	・他大学との防災に関する交流をしよう(防災交流会企画)	・市民ふれあいフェスティバル出展打ち合わせ	・朝倉視察 ・写真展の開催(キット送付)@徳島文理大学
10月	防災教育チャレンジプラン中間報告会(長野県災害支援開始)	・展示物の作成	・写真展の開催(協力出展)@市民ふれあいフェスティバル(ウエル戸畑)
11月	・長野県の高大生で写真展開催検討会	・山口県立大学学生と打ち合わせ	写真展の開催(協力出展)@北九州市内小学校
12月			防災交流会@山口県立大学
1月	・地域のなかで防災を考えよう(3月企画)	・展示写真印刷・作成	初詣 de 被災地復興応援@福井県宇波西神社
2月	防災教育チャレンジ最終報告会	・イベント準備・広報	写真展の開催(協力出展)@イオン八幡@ウエル戸畑
3月			防災イベント

プラン全体の反省点・課題・感想	<p>今年度の活動では、様々な機関と連携し進めることができた。その一方で、開催時期などが決まらず、断念する企画もあった。それぞれの活動に対し、余裕のある計画づくりが求められると感じた。</p> <p>また、大学生が主催する事業であった為、多くの協力を得ることができたものの、学生内、大学内での協力者はなかなか見つけ出すことができたかった。原因は、学内でのイベントなどが少なかったことが挙げられ、市民対象のイベントだけではなく、学内の大学生を対象としたイベントももう少し行う必要があると感じている。</p>
今後の活動予定	<p>今後も、①写真展全国キャラバン事業、②防災研修事業③防災教育・講演活動を継続して行っていくとともに、災害時の緊急支援活動として現在行っている、長野県における災害支援活動を継続して行っていく。</p> <p>また、全国の大学生や若者が災害ボランティアに参加する機会を増やすことのできる仕組みづくりを行っていく。</p> <p>さらに、被災地の状況をアーカイブ化して残すことで、被災地の復興の歩みを記録することや防災教育に活用することができるウェブサイトの作成を行っていきたい。</p>



実践したプランの内容と成果

記入日	2019年12月30日（2019年度のチャレンジプラン）
実践団体名	被災地を写真でつなぐ実行委員会
実践番号（団体内・年度内の通し番号）	⑦
タイトル	防災研修プログラム その1：被災地への防災研修ツアー 避難所体験宿泊～今からあなたは避難者です～ その2：防災新聞の作成とリアル避難ゲーム その3：我が家の防災計画書
実践担当者のお名前	須磨 航

実践にかかった金額	205,000円
実践の準備にかかった時間	数ヶ月
実践活動を実施した日時	2019年6月8日～2019年7月6日
実践の所要時間	1日目14時間、2日目8時間、3日目3時間、+α
実践の運営側で動いた人の人数	企画・運営スタッフ3人/運営ボラ16人 計19人
防災教育の対象者の属性	小学生（低学年）・小学生（高学年）・中学生・大学生・保護者・女性・養護学校児童生徒・防災関係者
防災教育の対象者の人数	21人
実践を行った都道府県と市区町村	福岡県北九州市／朝倉市
実践を行った具体的な場所	朝倉市／北九州市立大学／アドベンチャープール
★実践に必要な特定の能力を持った人・物品・ツール・知識等	段ボールベッド、LINE@、音響機器、地域と見立てることができ、安全を確保できる広い場所

達成目標	<p>その1の目標 九州北部豪雨における被災地の現状を伝え、風化を防止する。小学校という身近な場の災害の爪痕から、子どもたちが防災について考える機会を創る。復興や地域を活性化させる取り組みについて知るとともに、様々な支援のかたちがあることを伝える。「朝倉＝被災地」という面ではなく、「観光地」としての魅力を発信する。避難所における生活を想定した宿泊によって、非常時に使えるものについて知るとともに、模擬避難所での宿泊を体験する。</p>
------	---

	<p>その2の目標 1日目の経験・体験を、新聞づくりを通してアウトプットするとともに、グループで話すことで新たな学びを促進させる。リアル避難ゲームでは、家族や地域での避難を考えるタイミングや避難の方法（垂直避難やその場に留まる等）を選択することなど、ゲームを通して災害時の避難行動について考える機会を創る。</p> <p>その3の目標 「我が家の防災計画書」の作成および実践から、災害を自分事として捉え、実生活の防災に繋げる。家庭において、災害について考える機会を創るきっかけを創出する。</p>	
<p>どの力を身につけようとしたか？</p>	<p>知識・技能</p>	<p>かなり</p>
	<p>思考力・判断力・表現力</p>	<p>大いに</p>
	<p>学びに向かう力・人間性</p>	<p>大いに</p>
<p>実践内容・方法</p>	<p>その1 九州北部豪雨の被災地（福岡県朝倉市）へ視察。朝倉市では、旧松末小学校にて松末地域コミュニティ協議会の方に当時の状況をお聞きした他、杷木復興支援ベース（現：杷木ベース）のふれあい農園にて農作業を通じて地元の方と交流した。また、筑後川温泉ふくせんかでは、女将さんに平成29年の九州北部豪雨の状況や平成27年に発災した九州北部豪雨の状況についてもお聞きした。</p> <p>避難所体験宿泊では、避難してきたことを想定し、送られて来る支援物資をあらかじめ与えられたポイント内で交換し、1夜を乗り切るというゲームを行った。また、段ボールベッドや新聞紙スリッパを作るなどのワークショップも行った。</p> <div data-bbox="485 1435 1433 1619"> </div> <p>その2 その1で学んだことについて、アウトプットする時間として子どもと保護者に分かれ「防災新聞」を作成した。また、「リアル避難ゲーム」では、市内のプールを1つの地域と見立て、LINE@を使用し情報を発信したり、館内の音響設備を使用したりすることで災害時の情報を作りだした。参加者は、実際に家族や友人と避難する方法やタイミングを判断し、最終的な避難場所を決定した時点でゲームクリア</p>	

	<p>とした。</p> <p>その3 これらのプログラムから、実生活の中でどのように活かすのかを考えるプログラムとして「我が家の防災計画書」の作成を行った。参加者に自分の家の写真を撮ってきていただき、1ヵ月以内に家の中を災害から身を守ることでできるよう実際に取り組んでもらう。実施前と後が分かるように、写真を1つのワークシートに貼り、具体的にどの部分をどう変えたのかを記入し、発表してもらった。その後、参加者同士で各家庭が行った「防災計画」を見せ合い、それぞれの実践からさらに我が家でもできることを共有した。</p> <p>その後、すべてのプログラムを終えた感想を共有し終了した。</p> 
<p>得られた成果</p>	<p>その1 被災地の視察を通して、北九州市から参加した子どもたち自身が、被災した地域の状況を見聞きすることによって、被災について小学校内の学習では学ぶことができないものを感じることができた。また、地域住民との農業ボランティアを通して、地域の方との交流をしながら地域の状況を理解することができた他、協力することで実際に1つの作業が完了したということも、防災や災害時の動きにつながると考える。</p> <p>避難所体験宿泊は、1人5ポイントという制約と、これからどのような支援物資が来るか分からない状況の下で、どういった判断をするかということが求められるプログラムであった。「1夜を乗り切る」という目標においてどの物資を確保するか、子どもたちは楽しみながら考えているようであった。また、5ポイントのポイントは自由に譲渡することができるというルールの下、参加者同士で譲り合う光景も見られた。さらに、段ボールベッドや新聞紙スリッパの作成、非常食の</p> 

	<p>試食を通して、災害時の生活についても考えることができた。</p> <p>その2 防災新聞の作成においては、前日のプログラムを参加者同士で振り返り、どのようなことを感じたのかを共有することができた。新聞は子どもたちと保護者に分かれて作成したことで、年代によって感じたことや考えたことが異なる内容もあり、子どもたちの意見から保護者が考えさせられる場面もあった。</p> <p>リアル避難ゲームでは、実際に災害の状況を再現することにより、子どもたち自身が状況を想像しやすい訓練になった。このゲームを通して、どのタイミングどこに避難するかを家族や友人と話すことができたり、どの避難場所・ルートが安全なのかを考えたりすることができ、さらに、避難することが危険な場合その場に留まるという選択をする参加者も見られた。参加者がそれぞれの避難完了後、総括として</p> <p>①A区の住民がB区の避難所を使ってはいけないという規則はないこと ②避難する方法として、どこかの避難所に行くことだけが正解ではなく、垂直避難という方法やその場に留まるという方法があったこと ③SNSの情報がすべてあっているわけではないこと などを発信することができた。</p> <p>その3 「我が家の防災計画書」の作成を通して、これらの学びを実生活に活かすことができた。「参加しておしまい」ではなく、参加できなかった家族と一緒に家具の配置を変えたり、防災グッズを取り付けたりすることによって、家族の中で災害や防災・減災について考える機会を創ることができた。また、それぞれの家庭で行った取り組みについて参加者全員で共有することで、参加者同士で他の取り組みを今後の生活に活かすことができたと考える。</p>	
どのくらい身につきましたか？	知識・技能	かなり
	思考力・判断力・表現力	かなり
	学びに向かう力・人間性	大いに
課題・苦労・工夫	<p>2日間（6月8日9日）+1日間（7月6日）というプログラムの中で、普段の生活とは違う環境であるため、1日目の夜には参加者に疲れが見られた。避難所体験宿泊というプログラムを行う前に、被災地の視察は少しハードだったようであった。</p>	

	<p>子どもたちにとって、脅しにならない防災教育とは何かを考え、LINE@を使ったり、川や土砂崩れの小道具、音響を入れたり、ミッションというゲーム形式を取り入れたりしたことで子どもたち自身が考える機会を創れたと考える。</p> <p>一方で、これらのプログラムを2日間通して行ったことは、運営者側にとっては、負担の大きいものがあったと考える。また、旅行業法や道路運送法などの法律を考えながら、募集することがとても難しく、それぞれを理解した上で行うことが求められる。</p>
--	--

★運営・実践の担当者が協力を求めた人や団体（関係者）について	
関係者の名前・団体名	北九州市社会福祉協議会
関係者の名前・団体名	北九州市危機管理室
関係者の名前・団体名	アドベンチャープール
関係者の名前・団体名	北九州市立大学 / 北九州市立大学防犯・防災プロジェクト
関係者の名前・団体名	松末地域コミュニティ協議会
関係者の名前・団体名	杷木復興支援ベース（現：杷木ベース）
関係者の名前・団体名	筑後川温泉ふくせんか

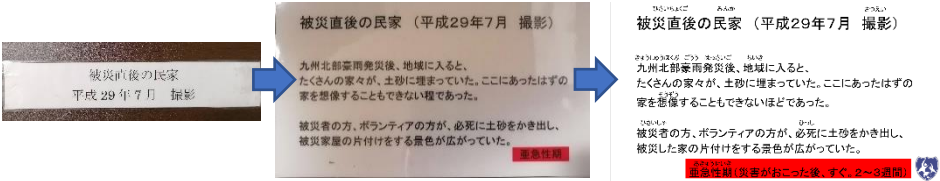
★この実践事例を通じてあなたが学んだことや誰かに伝えたいメッセージ	
伝えたい相手	参加していただいたみなさん、協力していただいた関係者の方へ
伝えたい内容	<p>子どもたち自身が主体的に防災について考えるには、どのようなプログラムを実施すべきか。それを考えながら実施したのが、今回の「防災研修プログラム」です。これらのプログラムを実施する中で、被災地の状況を見て、子どもたち自身が「なんでこうなったの？」</p> <p>「今はどんな地域なの？」避難所体験宿泊の中で「(僕の)ポイントあげるよ」「段ボールベッドで寝たの初めて！」リアル避難ゲームを通して「どこに避難しよう？」「そこは危ないよ！！」「もう避難できないよー！！！」など様々な想いを口にする状況を見ることができました。また、「我が家の防災計画書」においては、家族で話し合いを行ったご家族などもおられ、参加できなかった方が災害について考える場をつくってくださったことに感謝したいです。</p>

	<p>これらの子どもたち自身の学びの機会に参加することを提案・尊重してくださった保護者の方に感謝するとともに、これからも、防災・減災について家族で話し合っていただく機会を創っていただければと思います。また、このプログラムの実施に協力いただいた関係機関の方々に感謝いたします。</p>
--	---

記入日	2020年1月7日（2019年度のチャレンジプラン）
実践団体名	被災地を写真でつなぐ実行委員会
実践番号（団体内・年度内の通し番号）	⑦
タイトル	写真展全国キャラバン活動
実践担当者のお名前	須磨 航

実践にかかった金額	3,000 未満／回
実践の準備にかかった時間	数週間／回
実践活動を実施した日時	2019年4月8日 ～ 2020年3月31日
実践の所要時間	2週間～1カ月／回
実践の運営側で動いた人の人数	4人
防災教育の対象者の属性 非運営側として参加した人の主な属性	小学生（低学年）・小学生（高学年）・中学生・高校生・大学生・教職員・保護者/PTA・地域住民・社会人/一般・女性・障がい者・養護学校児童生徒・高齢者・防災関係者・全ての人々
防災教育の対象者の人数	約 350 人
実践を行った都道府県と市区町村	福岡県／徳島県／福井県／長野県
実践を行った具体的な場所	イベント会場／小学校／神社／公共施設
★実践に必要なだった特定の能力を持った人・物品・ツール・知識等	ハレパネ・両面テープ・黒画用紙

達成目標	<p>①2017年に発災した九州北部豪雨の風化を防止し、被災地の現状を発信し続ける。</p> <p>②発災から復興期までを展示することで、災害時のボランティアは一時的なものではなく、長いスパンでの関わりも重要であるということをお伝えするとともに、「うきはベース」という全国の大学生が利用した被災地の支援拠点の事例から、その資源の1つとして「大学生」も機能するということを社会に発信する。</p> <p>③当団体が写真展を主催するだけでなく、写真展キットとして展示写真などの貸し出しを行うことで、防災に関心のある地域住民や大学生自身が防災イベント企画などについて自ら行動することをサポートする。</p>
------	--

どの力を身につけようとしたか？	知識・技能	少し
	思考力・判断力・表現力	かなり
	学びに向かう力・人間性	かなり
実践内容・方法	<p>【実施内容】</p> <p>①写真展キットの作成</p> <p>展示する写真のナンバリングを行ったり、取扱説明書を作成したりすることで、写真展を行いたい方々が誰でも使えるようにキットを作成した。また、写真展の開催地募集要項を作成し、広報を行った。</p> <p>②展示方法や展示写真の見直し、改善</p> <p>これまで展示してきた開催地のアンケートをもとに、展示写真の見直し、展示方法・展示物の改善を行った。写真の見出しには、これまで撮影日と題名のみであったが、それに加えて、(1) どこで撮影した写真なのか、(2) 災害サイクルではどこにあたるのか、を加えた見出しを作成し、災害に関してより深く考えることのできる写真展になるよう心掛けた。また、ふりがなを入れたり、噛み砕いた説明の見出しを作成したりすることで、小中学生にも分かる写真展キットも作成し、防災教育として小学校でも使っていただけるキットとなった。</p>  <p>③写真展の開催・写真展キットの送付</p> <p>これらの展示物を、様々なイベントや施設などで写真展示を行った他、本来の目的である写真展キットを送付しての写真展も開催した。また、講演会や各企画の会場でも展示した。</p> <p>《今年度実施した写真展 計8回（講演会場での展示を除く）》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・うきはベース写真展～なんで祭りってするの？～（福岡県@神社） ・うきはベース写真展 in ばらマルシェ（福岡県北九州市@イベント） ・うきはベース写真展 in 瞬花祭（福岡県北九州市@大学） ・九州北部豪雨写真展 in 徳島（徳島県@徳島文理大学） ・九州北部豪雨写真展（福岡県北九州市@北九州市社会福祉大会） 	

	<ul style="list-style-type: none"> ・うきはベース写真展～知ろうよ災害・やろうよ防災～（福岡県北九州市@小学校） ・九州北部豪雨災害等写真展（福岡県北九州市@キッズイベント） ・九州北部豪雨災害等写真展（福岡県北九州市@イベント） 
<p>得られた成果</p>	<p>上記の写真展開催地から抜粋して、得られた成果を記述する。</p> <p><u>うきはベース写真展～なんで祭りってするの？～@福岡県宇波西神社</u></p> <p>五穀豊穡を祈るお祭りに合わせ「どうして祭りをするのか」という点をクローズアップし、自然の恵みをいただいている人間にとって、時に脅威となる自然との上手な付き合い方を伝える写真展となった。</p> <p><u>九州北部豪雨写真展 in 徳島@徳島文理大学</u></p> <p>徳島文理大学主催の写真展示であり、うきはベースの繋がりから実現した写真展であった。キットを送付することで、当団体が主体として行うのではなく、サポートする体制を整えることができた。</p> <p><u>九州北部豪雨写真展@北九州市社会福祉大会</u></p> <p>災害ボランティアの活動や福岡県朝倉市・長野県長野市の被災地の状況について発信することができた。また、内容を変更した見出しに対する評価も得ることができた。</p> 

	<p>うきはベース写真展～知ろうよ災害・やろうよ防災～@北九州市内小学校</p> <p>小学生が読むことができるふりがな入りの掲示物にしたことで、想定していた人数よりも多くの子どもたちが写真の前で足を止めてくれた様子であった。小学生の感想からは「一番びっくりしたのは音楽室です」「どれだけ水の力はすごいんだ!と思った」など、写真を見て感じたことや、「ぼくはこんなこと(写真展を見ること)しかできないけれどこれからもやっていきたい」「ひなさんが防災するためのものを用意しておいた方がよいと思います」といった自身ができることに関するコメントもあった。これらのように、写真を通して、子どもたち1人1人が災害について学んでいる様子が見られた。</p> <p>また、教員の先生からは「普段のテレビの中で終わってしまい、現状を知らず、教育に携わることにもどかしさを感じた」「何か子どもたちの心に残ったはず、この心に残った気持ちがこの子どもたちの未来につながって、大きく育っていくと思う」などのコメントをいただき、教育の中に「防災」という点を入れることができたと考える。</p> <p>さらに、今回の展示させていただいた小学校では、防災イベントを今後行う予定で、次に繋げることができた。</p>	
どのくらい身につきましたか？	知識・技能	少し
	思考力・判断力・表現力	大いに
	学びに向かう力・人間性	大いに
課題・苦労・工夫	<p>写真展を開催するにあたって、キットを送付し、主催者をサポートするという事業を行うことができた。しかし、その頻度は少なく、当団体主催の写真展が多い現状を変えることはできなかった。</p> <p>どういった方を対象として展示を行うのかにより、展示内容や展示する高さ、展示方法を変えることで、よりメッセージ性のある展示会</p>	



	を開催することができると思う。
--	-----------------

★運営・実践の担当者が協力を求めた人や団体（関係者）について	
関係者の名前・団体名	北九州市社会福祉協議会
関係者の名前・団体名	北九州市内の A 小学校

★この実践事例を通じてあなたが学んだことや誰かに伝えたいメッセージ	
伝えたい相手	全ての人々
伝えたい内容	写真展キットをお貸しします。 多くのイベント会場などで使用してください。 ご希望の方は当団体の連絡先にご連絡ください。

記入日	2020年1月17日（2019年度のチャレンジプラン）
実践団体名	被災地を写真でつなぐ実行委員会
実践番号	⑦
タイトル	追悼イベントから防災へ その1：被災した学生の声から学ぶ、あの日 その2：学校問題を災害として考える
実践担当者のお名前	須磨 航

実践にかかった金額	3,000円未満
実践の準備にかかった時間	1ヶ月
実践活動を実施した日時	2019年7月5日12時00分～20時30分
実践の所要時間	約6時間
実践の運営側で動いた人の人数	3人
防災教育の対象者の属性 <small>非運営側として参加した人の主な属性</small>	小学生（低学年）・小学生（高学年）・中学生・高校生・大学生・保護者・地域住民・防災関係者・その他
防災教育の対象者の人数	約50人
実践を行った都道府県と市区町村	福岡県北九州市
実践を行った具体的な場所	北九州市立大学内
★実践に必要なだった特定の能力を持った人・物品・ツール・知識等	プロジェクター・白画用紙・マジック・キャンドル

達成目標	<p>追悼イベントにおいて、九州北部豪雨・西日本豪雨の被災地に思いを馳せるとともに、その被災地支援活動を振り返る。</p> <p>これまでの災害において被災経験のある学生の語りから防災を考える機会を創る。</p> <p>災害が少ないと言われる北九州市において、災害を身近なところに当てはめることで、その解決方法を一緒に考え、日常の中にある災害に対しての向き合い方を探っていく。</p>	
どの力を身につけようとしたか？	知識・技能	かなり
	思考力・判断力・表現力	かなり
	学びに向かう力・人間性	大いに

<p>実践内容・方法</p>	<p>7月5日～7月7日までの3日間、「災害を考える3日間 九州北部豪雨・西日本豪雨追悼イベント～あの日、あの時を忘れない～」として実施した。また、7月～8月の間、大学内のパソコンをスクリーンジェックし、学内パソコンすべてのデスクトップを九州北部豪雨・西日本豪雨仕様にするこゝで、大学生への周知、本プランの広報を行った他、2か所の学内テレビを使い、九州北部豪雨の映像や災害への備えを啓発するスライドショーを上映した。</p> <p>本プランは7月5日の正午～昼の部、18:00頃～夜の部に分けて実施。昼の部では北九州市立大学生協と協働で、灯籠用の画用紙に被災地へのメッセージを書くブースを設置。大学生が参加し、その画用紙を使った灯籠を作成した。また、夜の部では、イベント参加者もメッセージを記入、灯籠を作成し、点灯した。</p> <p>学内での火気使用は、許可が下りなかったため電気キャンドルを使用し行った。</p> <p>夜の部は、当団体の活動報告終了後、以下を実施した。</p> <p>その1 被災した学生の声から学ぶ、あの日</p> <p>北九州市立大学に通う学生2名による報告。被災時の様子やその後の人生への影響についてなど、「被災時・被災後」という大きなテーマで話をしていただいた。</p> <p>◆ゼロからプラスへの過程～被災経験、支援活動から得たこと感じたこと～ 法学部4年 岸本勝也（兵庫県出身・元 当団体メンバー）</p> <p>◆西日本豪雨の経験から 地域創生学群1年 妹尾多恵（岡山県出身・現 当団体メンバー）</p> <p>その2 学校問題を災害として考える</p> <p>日常生活において災害を考える機会が少ないことや自分事として捉えることが少ないことから、自分事として災害を考える機会を創るために、災害には自然災害・人的災害の2つに分けられることを解説後、学校におけるいじめを災害に置き換え、考える時間を設けた。</p> <p>◆日常の中の「さいがい」～学校問題を災害の視点で考える～ 地域創生学群4年 須磨 航</p>
----------------	--

<p>得られた成果</p>	<p>イベントの参加者らの声や参加人数から、スクリーンジャック・スライドショーの上映により、九州北部豪雨の風化防止や災害への備えに対して一定の効果があったと考える。</p> <p>本プランの昼の部では、被災地への思いをつづることで、学生としてできる1つの災害支援を行うこともできた。また、2つの災害だけではなく「熊本地震での思いを書いてもいいですか?」という学生もおり、それぞれが思う災害について意見交換をすることができた。</p> <p>本プランの夜の部では、人の行き来が多いスペースで行うことで、気軽に参加できるイベントにすることができ、飛び入りの参加者も多かった。様々な境遇の報告者によって、災害に関する学びを得ることができた。また、学校でのいじめを災害の視点から考えることで、子どもが主体的に災害を考える機会を創ることができた他、他者を思いやる心が自然災害時にも大切なことであるということを発信することができた。</p> <p>九州北部豪雨の被災地朝倉市の方も参加していただくことができ、意見交換をすることができた。また、小中学生、大学生、北九州市民、大学教員、社協職員、朝倉市民など、立場の違った方々にたくさん参加いただいたことで、それぞれの立場からの意見交換・交流をすることができた。</p> <div data-bbox="1018 226 1430 495" data-label="Image"> </div> <div data-bbox="1024 510 1423 728" data-label="Image"> </div> <div data-bbox="1024 734 1423 958" data-label="Image"> </div> <div data-bbox="1161 972 1410 1137" data-label="Image"> </div> <div data-bbox="1161 1153 1410 1294" data-label="Image"> </div> <div data-bbox="1161 1301 1410 1467" data-label="Image"> </div> <div data-bbox="1102 1594 1410 1803" data-label="Image"> </div>	
<p>どのくらい身につきましたか?</p>	<p>知識・技能</p>	<p>少し</p>
	<p>思考力・判断力・表現力</p>	<p>かなり</p>
	<p>学びに向かう力・人間性</p>	<p>大いに</p>

課題・苦労・工夫	<p>大学内の学生を対象とした取り組みが少ないと感じた。</p> <p>自然災害に特化するだけでは、防災を発信することは難しい。今回は、自然災害について考えるだけではなく、身近なところから災害について考えることを目的とした。</p> <p>より年齢の近い学生の被災経験から災害について考えることができた他、いじめと災害は、一見全く違う物に見えるが、「誰かの行為によって、誰かを傷つけるもの」とすれば、人為災害にもなりえるのではないか、という論のもとで報告を行ったことは工夫できたと思う。</p>
----------	---

★運営・実践の担当者が協力を求めた人や団体（関係者）について	
関係者の名前・団体名	北九州市社会福祉協議会
関係者の名前・団体名	北九州市立大学
関係者の名前・団体名	北九州市立大学生生活協同組合

★この実践事例を通じてあなたが学んだことや誰かに伝えたいメッセージ	
伝えたい相手	
伝えたい内容	災害を自然災害・人的災害に分けて発信していくことが大切だと感じた。

記入日	2019年1月17日（2019年度のチャレンジプラン）
実践団体名	被災地を写真でつなぐ実行委員会
実践番号（団体内・年度内の通し番号）	⑦
タイトル	大学生による大学生のための防災交流会
実践担当者のお名前	須磨 航

実践にかかった金額	ほぼ0円
実践の準備にかかった時間	1ヶ月
実践活動を実施した日時	2019年12月23日16時30分～18時30分
実践の所要時間	2時間
実践の運営側で動いた人の人数	1人
防災教育の対象者の属性	大学生・教職員
防災教育の対象者の人数	11人
実践を行った都道府県と市区町村	山口県
実践を行った具体的な場所	山口県立大学

達成目標	<p>朝倉市や長野県の被災状況を発信するとともに、他大学の大学生との交流、災害に関する意見交換を通して、それぞれの学生の視野を広げる。</p> <p>平時における交流を通して、発災時に連携できる体制を構築する。</p>	
どの力を身につけようと思いましたか？	知識・技能	かなり
	思考力・判断力・表現力	少し
	学びに向かう力・人間性	大いに
実践内容・方法	<p>①朝倉市・長野県の災害支援活動をパワーポイントや映像・写真を通して発信した。</p> <p>②長野県のあるサテライトに集められた「支援物資」の写真を通して、意見交換を行った。</p> <p>③手話を使った災害支援現場の映像から、災害時に社会福祉関係者が関わる範囲について考えた。</p>	

得られた成果	<p>①により、被災した状況について発信することができた。</p> <p>② 1つの写真を提示し、これについてどう感じるか意見交換を行った。支援物資に対しての肯定的な意見とともに、過剰な支援物資に対する意見もあり、様々な考えを共有することができた。そのうえで、“第2の災害”とも言われる支援物資について現場における感想を述べた他、何か支援したいのであれば「現金」が大切であるということも伝えることもできた。</p>   <p>③手話の映像を通して、災害現場における福祉ニーズについて発信し、要配慮者への支援方法について議論することができた。今回の対象者は、社会福祉を学ぶ大学生を中心とした交流会であったため、社会福祉に関する災害時の対応について意見交換することができた。災害は日頃の社会の状況を浮き彫りにするものであるため、今回の交流は、福祉を志す学生にとって大切なものとなったという感想を得ることができた。</p>   <p>また、今回の交流を通して、今後も学生間で連携できる体制を構築することで調整することができている。</p>	
どのくらい身につきましたか？	知識・技能	かなり
	思考力・判断力・表現力	少し
	学びに向かう力・人間性	大いに
課題・苦勞・工夫	<p>今回の交流会を通して、大学生同士の交流という物も大切であるということを再認識した。他大学との日頃の関わりが災害時に活かされるよう、これからもこのような学生間での交流を促進していきたい。</p>	

★運営・実践の担当者が協力を求めた人や団体（関係者）について

関係者の名前・団体名	山口県立大学
------------	--------